

**京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書**

平成21年4月17日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 辻 井 昭 雄 様

京 都 大 学 総 長

松 本 紘

事業区分	平成20年度・大学全体計画事業助成			
事業名	京都大学国際シンポジウム			
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()			
会計報告	事業に要した経費総額	10,580,000 円		
	うち当財団からの助成額	9,290,000 円		
	その他の資金の出所	(機関や資金の名称) 大学共通経費及び部局経費		
	経費の内訳と助成金の使途について			
	費 目	金 額 (円)	財団助成充当額 (円)	
	[第11回] 国外旅費	3,500,000	3,500,000	
	国内旅費	170,000	170,000	
	会議費	640,000	220,000	
	印刷費	1,130,000	1,130,000	
	その他	100,000	0	
	[第12回] 国外旅費	130,000	130,000	
	国内旅費	322,000	322,000	
会議費	2,970,000	2,550,000		
印刷費	1,268,000	1,268,000		
その他	350,000	0		
合 計	10,580,000	9,290,000		

成 果 の 概 要

京都大学総長 松本 紘

京都大学では、世界に開かれた大学として先端的な学術研究を積極的に展開していくため、平成12年度より毎年、本学が誇る独創的な学術研究を対象とする国際シンポジウムを海外で開催しています。平成20年度は、中国・上海と日本・京都においてのシンポジウムを開催しましたので、ここに報告します。

第11回京都大学国際シンポジウム

10月9日(木)から11日(土)にかけて、上海の復旦大学キャンパスにおいて、「第11回京都大学国際シンポジウム：Frontier Bioscience in Modern Medicine」を開催しました。

今回の発表者・聴講者合わせての出席者は、学術報告と対話が行われた二日間で延べ約700人。開催協力校の復旦大学をはじめ、浙江大学(Zhejiang U)、南京大学(Nanjing U)、第四軍医大学(The Fourth Military Medical U)、四川大学(Sichuan U)、華中科技大学(Huazhong U of Science and Technology)、南京医科大学(Nanjing Medical U)など中国各地の大学の医薬系の研究者・学生を中心に多数の出席者があり、大きな盛り上がりを見せました。

シンポジウムは、復旦大学上海医学院の明道楼(Reporting Hall of Mingdao Building)において行われ、湊教授の司会・進行により、最初に松本総長と復旦大学のWeiping WANG理事から、開会の挨拶が行われました。松本総長は、近年発展の著しい医学の分野において、国際連携がますます重要になってきている中、特に中国との大学間交流によって生み出される人類史的貢献の高さについて述べ、今後の両国関係の前途を祝いました。各セッションでは、分子生物学やiPS細胞など、京都大学が誇る先端医学研究に関わる17名の発表者(医学研究科、ウイルス研究所及び再生医科学研究所)と、復旦大学上海医学院から4名、計21名の発表者によって、研究報告が行われました。会場には初日から多くの聴講者が訪れ、真剣な質疑応答が展開、2日目には収容人数を上回り、立ち見の聴講者も出るほどでした。

また、京都大学の関係資料を設置したコーナーには多くの人が押し寄せ、このシンポジウムを機に、中国における京都大学への関心が高まったことが感じられました。

最終日のセッション終了後には、Xiaoyuan FENG上海医学院長及び横山俊夫国際交流推進機構長からの閉会挨拶の中で、シンポジウムの成功と、関係者への協力への謝辞があり、京都、復旦両大学及び日中間の学術交流のさらなる展開を願って幕を閉じました。

第 12 回京都大学国際シンポジウム

12月5日(金)から6日(土)にかけて、京都大学時計台記念館百周年記念ホールにおいて、「第12回京都大学国際シンポジウム：変化する人種イメージ - 表象から考える」を開催しました。今回のシンポジウムは、二日間で延べ約430人の参加がありました。悪天候にもかかわらず、内外の研究者や学生のみならず学界外からも多数の方々が集まり、大きな盛り上がりを見せました。

シンポジウムは、5日午後、本学人文科学研究所 岩井茂樹教授の総合司会のもと、本学 松本 紘総長及び人文科学研究所 金 文京所長の挨拶によって開幕。続いての趣旨説明では、本シンポジウム実行委員長、人文科学研究所 竹沢泰子教授から、「人種」と言われるものをめぐり現実感が生まれ、それが持続するしくみについて、欧米の学説とは異なる見解が示され、京都大学の特色を生かした文理融合型の対話を通して「差異」についての新たな考え方を探りたいとの呼びかけがありました。

続いてニューヨーク大学 エラ・ショハット教授による「ステレオタイプ、表象、『リアルなもの』 - 方法論をめぐる提起」と題する基調講演、さらに学内外の研究者による発表、若手研究者によるリレートークが行われ、別室で行われたポスターセッションも活況を呈しました。

2日目は、まず本学の横山俊夫国際交流推進機構長が歓迎の辞を述べ、本学の学風が、つねに現場に立つことを重視すること、またそこから生まれる独創的な発見を語る際に強い言語意識を発揮してきていることを、海外からのゲストに説明。その後、カリフォルニア大学バークレー校及びニューヨーク大学兼任の トロイ・ダスター教授による「人類遺伝学と人間の分類 - 流動性、連続性、変化」と題した基調講演をはじめ、サセックス大学 マーガレット・スリープーム=フォークナー教授、インディアナ大学 マーヴィン・スターリング博士をはじめ内外の研究者7名による発表、それらを踏まえて人文科学研究所 田辺明生准教授の司会による全体討論が行われ、講演者、発表者はもとより、ヒトゲノムの微細な差異の国際統計解析事業に関わる本学医学研究科 松田文彦教授を始め、各セッションの司会者も再登壇し、会場から提出された質問もとり入れつつ活発な意見交換が展開され、終了予定時刻を大幅に越えて熱気のうちに閉幕しました。

翌12月7日は、人文科学研究所において外国からの出席者を含む約20名による専門家会議が開かれ、理論化に向けてさらに掘り下げた議論が交わされ、京都大学国際シンポジウムの機会がさらに活かされることになりました。

当事業を推進するにあたり、貴財団より多額の助成をいただきましたことに対し、深く感謝するとともに、篤く御礼申し上げます。